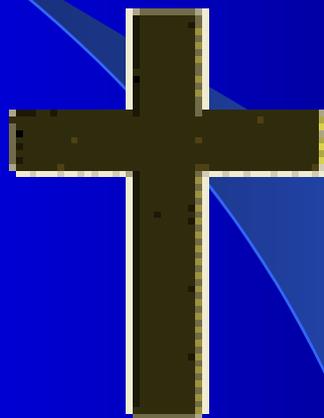


第一コリントの信徒への手紙クラス
「十字架の言葉は神の力です」

第一コリント1:18



東京キリストの教会

クラス1

- 1) 古代コリントの歴史と背景
- 2) コリントの教会の設立
(使徒18:1-18)
- 3) 一章: 十字架の言葉

1) 古代コリントの歴史と文化

現代ギリシャ

当時はローマ帝国のアカイア州
(ペレポネスス半島)の首都

World of the New Testament, Around A.D. 50



古代コリント。山はアクロコリント
女神アフロディテの神殿がその上に
建てられていた



1) 古代コリントの歴史と文化

ギリシャで最も栄えていた都市の一つ
(プライド)

西にはレケム (Lechaeon) 湾、東にはケンクレアイ (Cenchrea) 湾 (使徒 18 : 18)

西はイオン海、東はエーゲ海

西のイタリア貿易、東のギリシャ貿易の中心地だった

西にはレケム湾、東にはケンクリア湾



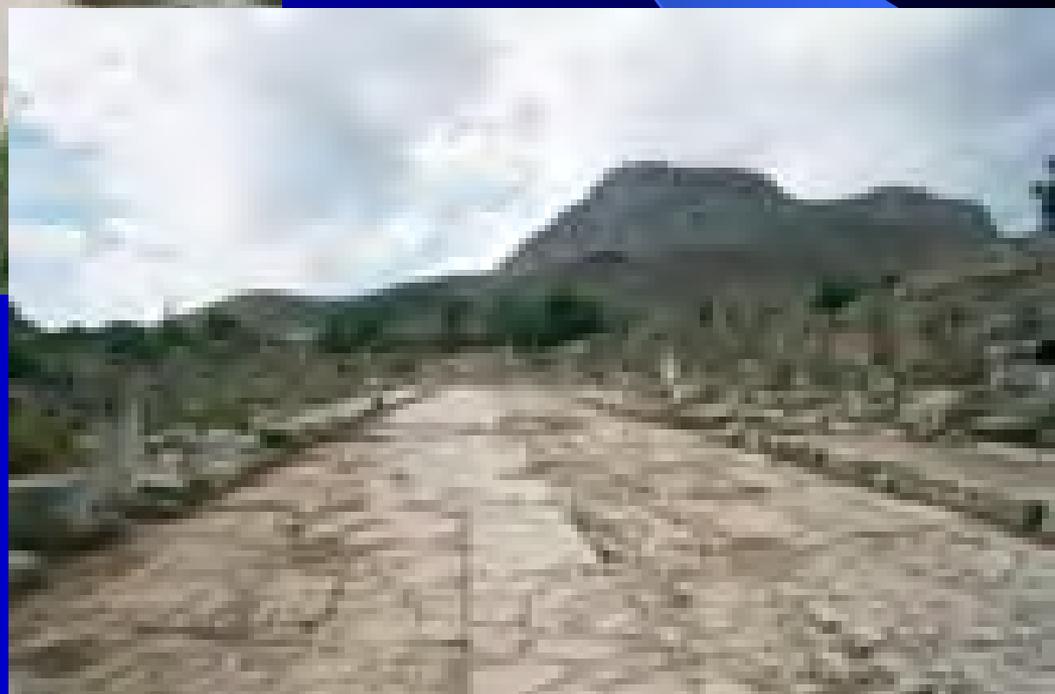
ケンクレアイ湾



アクロコリントから見えるレケム湾



レケム湾とコリントを結ぶレケム道路



古代コリントの歴史と文化

現在西と東の湾をつなぐ運河がある

当時は運河は無かったが、小型の船を陸で渡らせるための道路が建設されていた（ディオルコス）

これによってイタリアから東（トルコ又は中近東）への貿易の距離が大いに縮まった

コリント運河



ディオルクス



古代コリントの歴史と文化

- 1500年BCからの歴史
- 貿易によって栄える（**お金持ち**）
- 146BCローマ帝国との衝突。マミオスによって崩壊。男子は皆殺し、女性、子供は奴隷になった。100年も人間不在（**闘志一ファイト**）
- 44BCユリウスカエサルが再建。イタリア人を連れて来て植民地化した
- パウロの時代はまだ新しい都市であった



古代コリントの歴史と文化

- 建築に関しては当時世界一と言う者もいた。特に神殿、宮殿、劇場関係
- コリント式の建築は今だに有名
- 多くの肖像を誇った：ビーナス、ダイアナ、アポロ
- 裕福であったので贅沢な生活をしている人が多かった（高慢さ）
- 芸術、科学、文学などは栄えた（インテリ系）

アクロコリントとコリント



古代コリントの歴史と文化

- 2年に一度、現代のオリンピックのような競技が行われた-イストマス祭典 (Isthmian Games) (体育会系)
- 9章でパウロは競技のたとえで話したことは彼らにとって分かりやすい表現だった

古代コリントの歴史と文化

- 商売の中心地であったため、腐敗した不品行な社会であった
- コリントの宗教には売春制度が許されていた（**道徳基準の低さ**）
- 「コリントを行う」という表現は売春行為を行う意味を持った
- 男売春もいて、長い髪をしていた



古代コリントの歴史と文化

- 国の文化と習慣はこの世に生きるクリスチャンにとっては大きな影響を与えた
- コリントの道徳基準が低い社会はクリスチャンにとって多くの誘惑の源となった

Paul's First and Second Journeys



第一·第二宣教旅行



- Paul's first journey
- Paul's second journey

2) コリントの教会の設立

- 使徒18章：1－18節
- 第二宣教旅行中アテネの後訪れた
- 50 A.D. から約一年半（使徒18：1）滞在した
- 「ガリオ碑文」により年が推定されている
- デルフイ市から発掘された碑文にガリオがアカイア州の総督であるという言葉が皇帝クラディウスによって記されている

第一コリントの信徒への手紙クラス

「十字架の言葉は神の力です」

第一コリント1:18

クラス1

- 1) 古代コリントの歴史と背景
- 2) コリントの教会の設立 (使徒18:1-18)
- 3) 一章：十字架の言葉

1) 古代コリントの歴史と背景

現代ギリシャ。当時はローマ帝国のアカイア州（ペレポネソス半島）の首都。
ギリシャで最も栄えていた都市の一つ。

（プライド）

西にはレケム（Lecheon）湾、東にはケンクレアイ（Cenchrea）湾（使徒18:18）

西はイオン海、東はエーゲ海

西のイタリア貿易、東のギリシャ貿易の中心地だった（プライドが高い理由）

現在、西と東の湾をつなぐ運河がある。

当時は運河は無かったが、小型の船を陸で渡らせるための道路が建設されていた（ディオルコス）。
これによってイタリアから東（トルコ又は中近東）への貿易の距離が大いに縮まった。

1500年BCからの歴史 貿易によって栄える（お金持ち）。

146BCローマ帝国との衝突。マミオスによって崩壊。男子は皆殺し、女性、子供は奴隷になった。
100年も人間不在（闘志ファイト）

44BCユリウスカエサルが再建。イタリア人を連れて来て植民地化した。
パウロの時代はまだ新しい都市であった。

建築に関しては当時、世界一という者もいた。特に神殿、宮殿、劇場関係
コリント式の建築は今だに有名。

多くの肖像を誇った：ビーナス、ダイアナ、アポロ

裕福であったので贅沢な生活をしている人が多かった（高慢さ）。

芸術、科学、文学などは栄えた（インテリ系）。

5年に一度現代のオリンピックのような競技が行われた。-イストマス祭典（Isthmian Games）（体育系）
9章でパウロは競技のたとえで話したこれは彼らにとって分かりやすい表現だった

商売の中心地であったため、腐敗した不品行な社会であった。

コリントの宗教には売春制度が許されていた（道徳基準の低さ）。

「コリントを行う」と言う表現は売春行為を行う意味を持った。男売春もいた。長い髪をしていた。

国の文化と習慣はこの世に生きるクリスチャンにとっては大きな影響を与えた。

コリントの道徳基準が低い社会はクリスチャンにとって多くの誘惑の源となった。

2) コリントの教会の設立

第二宣教旅行中アテネの後訪れた。

50 A.D. から約一年半（使徒18：11）滞在した。

「ガリオ碑文」により年が推定されている。

デルフィ市から発掘された碑文にガリオがアカイア州の総督であるという言葉が皇帝クラディウスによって記されている。

使徒18章：1-18節

1-3節 プリスキラとアキラはローマ出身。皇帝クラウディウスの命令によってローマから追い出された。その後ローマへ帰り、家教会をリードする（ローマ16：3-5）。

8-11節 会堂長のクリスポや多くの人々が改心された実りの多い働きだった。しかしそれでもパウロは恐れていた。この時点ですでにコリントの教会に関して苦勞し、あきらめそうになっている。弱さの中、神様に頼らざるをえない。神様に励まされ、あきらめず、一年半も滞在した。

14-17節 難しい状況を通して神様は人の救いをもたらす。このソステネは兄弟になる（1コリント1：1）

使徒18章の教訓：辛くてもあきらめない。弱い時こそ神様に祈り頼ること。そうすれば必ず神様が守ってくださり、時には実り多い働きにしてくださる。

3) 一章：十字架の言葉

第一コリント1章

1-9節 パウロのコリントの教会に対しての見方。実際にたくさんの罪があったにも関わらず、靈的な賜物は何一つかけていないと言う。まずパウロは実態ではなく神様が見るように彼らを見ている。十字架によってどんなに罪があっても清められている。そしてパウロはビジョン（信仰）をもってコリントの教会に接している。問題だらけの教会だか、十字架の力によって完全に換えられると信じている。

10-17節 分裂の原因はコリント人が人間的になっていたことであった。自分が所属していた派がステータスになっていた。しかしバプテスマを授ける人など一切関係なく十字架に架かってくれたのはイエスだけ。福音が大事。福音に正しく反応すると正しいバプテスマもそこにある。

18-26節 十字架は救われる者にとって神の力。滅びる者にとって愚かなこと。十字架は個人的に経験するもの。人に説明できるものではない。言葉ではなく十字架上のイエスと対面することによって人生が完全に換えられること。そこにすべての動機がある。

ユダヤ人は奇跡を求める。ギリシャ人は知恵を要求する。日本人は何を要求するか？

個人的な文化よりも、歴史よりも十字架。

賛美歌「さかえの主イエスの十字架をあおげば、世の富、誉れはちりにぞ等しき」Isaac Watts氏による賛美歌。Charles Wesley氏がこの賛美歌を絶賛。なぜかという十字架のエッセンスを歌にしたから。十字架をじっくり仰ぎ見る必要がある。チラッと見るのでは十分ではない。

しっかりと十字架を見つめる時に世の富や自分のプライドがなにものかよく分かるようになる。

26-31節 自分はどこから来たか思い出す必要がある。それを忘れて十字架を見なくなると高慢になり、自分を見失ってしまう。自分が何をやったかとか、どれほどがんばっているか。それはすべて十字架の前で無に等しい。

コリントの教会の様々な問題の答え：すべては十字架にある。

十字架に戻る事さえすればすべての問題を解決できる。

最後のまとめ：最近十字架をじっくり仰ぎ見ているか。

自分がどこから来たか忘れてないか？時間をとって、じっくり十字架を仰ぎ見る。